

IV 花き

実況

1 キク

奥越の秋植え夏ギクの草丈は、例年より短い規格のものが多くなっている。「夏ゆたか」で 54 cm、「つるぎ」で 46.5 cm、「なるみ」で 53 cm、「せいざ」で 40 cm であった（図 1）。

病害虫として、「白霧」と「とび丸」でべと病が中～大発生している。ハマキガ、アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類の発生が見られ、春植え苗にもべと病が発生している。春植えでは、一部で白さび病も発生している。

キク部会の作見は 5 月 20 日に行われた。共撰は 6 月 10 日頃から行われる見込みである。

あわら平坦地の春植え夏秋ギクは、4 月 15 日前後から定植された。

秋植えについては、無加温施設にて 6 月咲きギクの「さきかぜ」等 3 品種が栽培されている。草丈は 65～75 cm、葉数 38 枚で収穫直前である。露地栽培のものは、草丈 15～20 cm で生育が遅い。

病害虫として、4 月に発生した立枯病は収束傾向である。

春植え露地栽培のキクは、4 月下旬から定植が始まった。旧盆出荷のキクの定植は 4 割程度終わっていない。総面積は 2 反、圃場排水が悪いため、作業性が悪化している（5 月 15 日調査）。

表1. 凍霜害(シカミ)発生における品種間差異

発生率	品種名
高	織姫、精かのか、精ひなの、シューペガサス、あかね、あい姫、秀まこと、奥越の舞、玉姫
低	釣船、白船、めぐむ、秀うきぐも、秀ちはや、小紫、小鈴

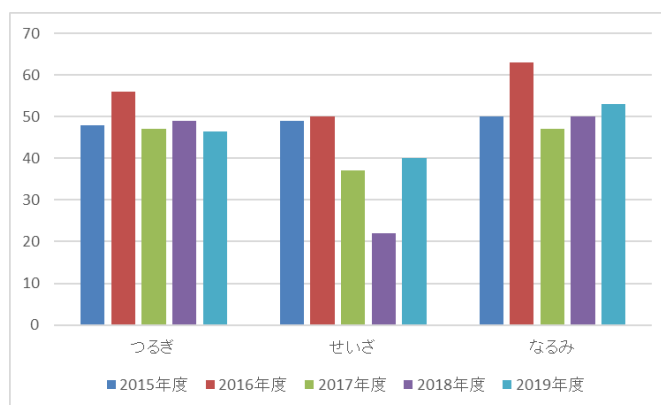


図 1 6 月咲品種の年次別草丈(5 月中旬調査)

福井市東郷地区の春植え夏秋ギクは、定植が 4 月下旬（昨年 5 月 1 日前後）、摘芯はおおむね 10 日後に実施された。エスレルが 1 回散布と 2 回散布を予定している。

病害虫は特に発生していない（5 月 15 日調査）。

秋植えギクは、小ギク黄色系品種で草丈 62 cm、開花前半、小ギク赤系品種で草丈 63 cm、開花が始まっている。

病害虫としてアブラムシ類とハモグリバエ類が少発生している（5 月 14 日調査）。

福井市大土呂地区の春植え夏秋ギクの定植は 4 月 13 日～17 日（昨年 4 月 20 日前後）、摘芯は定植から 7～10 日後（昨年 4 月 26 日）に行われた。今後の天候を見て、エスレル散布を毛等する。摘芯後の腋芽長は、5 月 14 日の調査（昨年 5 月 15 日）で、「小紫」で 4 cm（昨年 2 cm）、「小鈴」で 3 cm（昨年 2 cm）であった。アブラムシ類が少～中発生している。

越前市の春植え夏秋ギクは、定植が 4 月 20 日～25 日頃にかけて行われた（昨年 4 月下旬から 5 月 10 日頃）。摘心は 1 週間後に実施。エスレル処理は 1 回散布と 2 回散布を行っている（5 月 15 日調査）。

丹生の春植え夏秋ギクは、定植が4月8日～11日に多く行われたが、圃場の一部は4月22～23日に行われた（昨年4月13日から4月末まで）。摘心は定植から7～10日後に行われたが、遅くなったものは定植4日後に実施した。摘心後の脇芽長は、「小鈴」で5.5 cm（昨年8 cm）、「花絵」で1.7 cm（昨年1 cm）、「恋心」で5.7 cm（昨年6 cm）であった（5月14日調査）。

病害虫の発生は特になかった。

9月咲きギクは5月8日前後（昨年5月5日前後）に定植され、5月16日～17日に摘心を行った（5月15日調査）。

二州の秋植えした「小鈴」等の品種では、4月上中旬に摘心が行われた。5月15日（昨年5月15日）の調査での草丈は、「小鈴」で12.6 cm（昨年24.8 cm）、「花絵」で12.4 cm（昨年24.6 cm）、「さざなみ」で15.4 cm（昨年26.4 cm）であり、昨年よりも短くなっている。

病害虫として、アブラムシ類は一部で多発生している。

春植え夏秋ギクは、4月26日～定植が行われ、5月15日調査（昨年5月15日）では、「小鈴」で3 cm（昨年2.5 cm）、「花絵」で6.6 cm（昨年2.4 cm）、「はじめ」で2.2 cm（昨年1.6 cm）であり、昨年より生育は良好である。

病害虫として、アブラムシ類は一部で多発生している。

若狭の露地の秋植えギクの草丈は、5月14日調査（昨年は5月16日）、「はなふさ」では草丈69.2 cm、芽立ち数19～25本（昨年51.6 cmで25～27本）、「はじめ」で草丈63.4 cm、芽立ち数21～23本（昨年74 cmで10～16本）、「とび丸」で草丈50.6 cm、芽立ち数15～18本（昨年59.8 cm、10～13本）で、昨年より芽立ち数が多くなっている。

病害虫として、アブラムシ類が微発生している。

春植え夏秋ギクの定植は4月16日より行われ（昨年4月11日）、4月30日、5月1日に摘心が行われた（昨年4月29、30日）。5月14日の調査（昨年5月16日）で、「くれない」で草丈4.4 cm（昨年6.2 cm）、「翁丸」で5.6 cm（昨年9.8 cm）、「しらかば」で6.5 cm（昨年9.6 cm）で昨年より草丈が短くなっている。

病害虫として、ハモグリバエ類が微発生している。

小浜市の9月咲き作型は4月29～30日に挿し芽が行われ、5月20日に定植が完了した。

2 ユリ

大野市では、暮植え中心球栽培の個体で、7月に2,000本出荷を予定している。

春江では、4月27日にオリエンタル系の「クリスタルブランカ」、「ソルボンヌ」等の品種がハウス内に定植された。草丈は5～10 cmで短めである。古いハウスではLAユリの生育が悪くなっている。

あわら市の季咲7～9月出荷の作型において、シンテッポウユリ「オーガスタ」は4月上旬に露地に定植された（7月中下旬出荷用）。断続的に育苗が行われている。本葉5～6枚程度で生育は順調である。8月下旬～9月出荷用の「雷山3号」、「オーガスタ」は、5月連休中に露地に定植されたが、育苗中の個体もある。

3 トルコギキョウ

あわら丘陵地では抑制二度切り栽培のレイナ系、ロベラ系他の品種で、2番花が草丈20～45 cm（昨年20～30 cm）、芽の選りは終わって、1株当たり2本/株（昨年2～3本）に整理した。天花は未確認である。ハウスによって生育の差が大きく、水不足の傾向があるハウスでは生育は弱めである。

病害虫として、アザミウマ類が部分的に少発生している。

2月定植新盆出荷栽培のロジーナ系品種他では、2月20日に利頃に定植が終わり、5月13日の調査で草丈10～15cmである。ロゼット株は見られない。

4月定植旧盆出荷栽培のファイナル系、PFソロ系品種他では、4月下旬に圃場に定植され、活着は良好である。

越前市では5月14日調査（昨年5月15日）で、昨年夏に定植された二度切り栽培用の品種で、二度切り目の草丈は26cmであった。盆用の品種は4月27日～28日頃にかけて定植され（昨年4月下旬）、草丈は3cm（昨年3cm）、4対葉で抽苔始め（昨年4対葉で抽苔中）である。6月咲作型の「フルフル」で草丈35cm、15対葉で未発蕾、「ボヤージュグリーン」では草丈52cm（昨年48cm）、17対葉（昨年15対葉）で発蕾中である。

病害虫の発生は特にない。

美浜町の盆出し作型は、本葉3～4枚が展開している（5月15日調査）。



写真2 出荷適期のシャクヤク

若狭では、4月10日から購入苗の定植が始まった（5月14日調査）。

5 その他

奥越のシャクヤクは5月8日から出荷が始まった。例年よりやや短めの規格のものが多い（写真2）。

アリウムギガンチュームは、5月25日頃から出荷が始まった（写真3）。



写真3 アリウム圃場

あわら市のアスターは電照促成栽培のものが3月中旬にハウス内に定植され、電照を打ち切った区画も見られる。

ひまわりは、3月に播種の品種で草丈85～100cm、葉数21～23枚で収穫中、2月下旬播種の品種は収穫終了。

キンギョソウはほぼ5月で収穫が終了した。

対策

1 圃場の排水徹底

梅雨期、雨が多く降ると畝溝へ滞水し根腐れをおこし、下葉の枯れ上がりや生長の低下などにより出荷量が低下するので、次の対策を行う。

- 1) 畝溝の排水、水の通りを良くするため、溝さらえや除草を行う。
- 2) 畝溝と直角に交わる集水溝を畝の両側（できれば圃場周囲）に必ず設け、排水溝に落とす。すでに設置してある場合は清掃や除草を行う。
- 3) 排水溝が高く排水しにくい場合は、雨の時に強制排水を行うため、排水溝の端に集水枿を設置し、ここからポンプで強制排水を行う。



写真4 排水不良圃場。入梅前に対策を行う

- 4) 7月咲の暮れ植えギクの場合、滞水が続くと根の活性が低下するので、通路や肩の土を削り、地際に土寄せする。この作業により新根発生が促されるため、生育が向上する。
- 5) 過湿気味の圃場で栽培された花卉は日持ちが悪くなりがちであり、キクではいちょう病の発生につながるため、極力、上記の対策を励行する。

2 秋植え夏秋ギクの管理

- 1) 花芽分化後の乾燥は、花卉の伸びが悪く小輪となるため、中輪品種では乾燥させないように注意する。
- 2) 花芽分化後（開花の40日前）に、止め肥として10a当たり窒素成分で5kg程度を、畝の肩部分に施用し、肥料の分解と上根の発根促進のため、土寄せを必ず行う。特に高温期はガス害の懸念もあるため、速やかに土寄せする。
- 3) 止め肥施用後、降雨が多い年は生育後半に肥料が切れる。葉色が落ちた場合はOKF-1、ハイポネックス等の500～1000倍で葉面散布をするが、白さび病や褐斑病がみられる場合は施さない。
- 4) 中輪品種では発蕾始めに花首の伸長を抑制するために施設栽培（雨よけ栽培）でピーナイン水溶剤80を10a当たり500～5000倍液50～150リットルを茎葉散布する。伸びやすい品種は1000倍程度で茎葉散布を行い、確実に効かせる。

3 梅雨期の病虫害防除

1) キク白さび病

気温が25℃以下の湿潤な時期に発生する。草丈50～60cmまではジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで1週間に1回の予防散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間に、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、マネージ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル、これらは品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布するが、同一系統の連用による耐性菌の出現に注意する。ハチハチ乳剤も白さび病に登録がある。

2) キクのアザミウマ類

苗を新たに導入した場合は特に注意して防除する。キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマなどの各種があるので、種を確認した上で効果や抵抗性を考慮して薬

剤を選定する(写真5参照)。特に圃場での切り残し花が発生源となるので早期に除去する。また、ミカンキイロアザミウマはキクのえそ病(TSWV)を媒介するので特に発生に注意する。

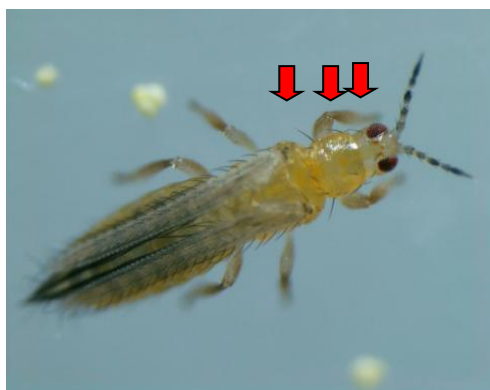


写真 5-1. ミカンキイロアザミウマ

- ・体が大きくて、毛深い印象がある
- ・触覚の様様のはっきりしている
- ・涼しい時期に、花(花粉大好き)に発生しやすい
- ・体色は春～夏(温かい時期)は黄色、冬季(寒い時期)は褐色
- ・前胸部背面の後縁と前縁、複眼の下に長い毛(矢印)



写真 5-2. ミナミキイロアザミウマ

- ・夏から秋に、葉っぱに発生しやすい(暖かいところが好き)
- ・前胸部の背面の後縁に長い毛(矢印)

3) キクのマメハモグリバエ

5月中下旬から優占種がナモグリバエからマメハモグリバエに変わる場合が多い。葉に対する食い込みが多くなると枯れ上がりが増えるため、初期防除を徹底する。マメハモグリバエは幼虫が黄色で、幼虫はさなぎになる前に葉から落下し地中やマルチ上でさなぎとなる。5～7月に発生が多い。発生予察は黄色粘着シートで可能である。

4) ユリ葉枯病(ボトリチス菌)

花芽分化期以降、葉枯病に感染しやすく、圃場排水が悪い条件では特に発生が多くなるので防除を徹底する。雨よけ栽培を行うと発生は少なくなる。露地栽培では出荷の30～40日前、施設で50日前までは、セイビアフロアブルやダコニール1000などの保護殺菌剤を、1週間に1回散布する。発病を認めたら、発病初期にアフエットフロアブル、ポリオキシシ AL水溶剤等の治療剤を散布する。展着剤では、保護殺菌剤には展着剤なしで散布するが、施設栽培では汚れ軽減のため界面活性剤系の展着剤を用いる。

4 促成スイセンの花芽分化促進処理

- 1) 高温処理開始までに球根の表皮が親指の腹で簡単にむけるくらいに十分球根を乾燥させる。
- 2) 高温処理は2週間行う。
- 3) くん煙処理は高温処理後にモミガラを1日3時間の割合で3日間燃やして行うか、密閉できる容器等でエチレン気浴処理（エチレンガス 100ppm）を1日3時間、3日間処理する。
- 4) 処理後は植え付けの7月下旬まで、風通しのよい納屋や車庫などで保管する。
- 5) 腐敗した球根は取り除き、7月末日ぐらいをめどに定植する。

5 トルコギキョウの葉先枯れ症

- 1) トルコギキョウの葉先枯れ症は、極端な水分ストレスにより、カルシウム欠乏となり、生育中期に上位葉の葉先が褐変や萎縮し、ひどい場合には心止まりになる（写真6）。組織中にカルシウムが少ない品種は出やすく、障害を受けやすい傾向にある。
- 2) 昼温が高いほど発生しやすくなるので、ハウス内の換気に努める。ハウス内の空気が動いている場合は発生が少ないとされるため、内気扇も有効である。
- 3) 発生しやすい品種については、花芽分化の時期を中心にカルプラス等を数回、葉面散布する（定植約1カ月後から出蕾期までの間、週1回散布するとよい）。ただし、灰色かび病、炭そ病が発生した圃場では施さない。



写真6 カルシウム欠乏による葉先枯れ症

6 梅雨期の切り花出荷（写真7、8参照）

梅雨時期に出荷する場合、出荷箱内での花や葉から、ムレにより灰色かび病等による荷いたみが生じやすいので次のことに注意する。

- 1) 収穫前にハウスの換気を十分に行う。
- 2) 露地栽培の切り花を、降雨時に収穫した場合は茎の下を持って振り、花卉の間や葉にたまった水を極力取り除く。
- 3) 収穫後に切り花の基部を水中で切り戻し、水揚げを円滑にする。「水切り」等によってできる、切り下の茎や葉はいけ水に溜まらないようにする。いけ水は頻繁に交換する。
- 4) 収穫後、箱詰めまでに花全体が乾くように風通しをよくする。咲きすぎた花は調整時に除く。エアコンの除湿運転や扇風機などで花をできるだけ乾かす。
- 5) 出荷箱に詰めてからも、出荷間際まで箱をあけておき、花全体をできるだけ乾かす。



写真7. 天井設置の攪拌扇

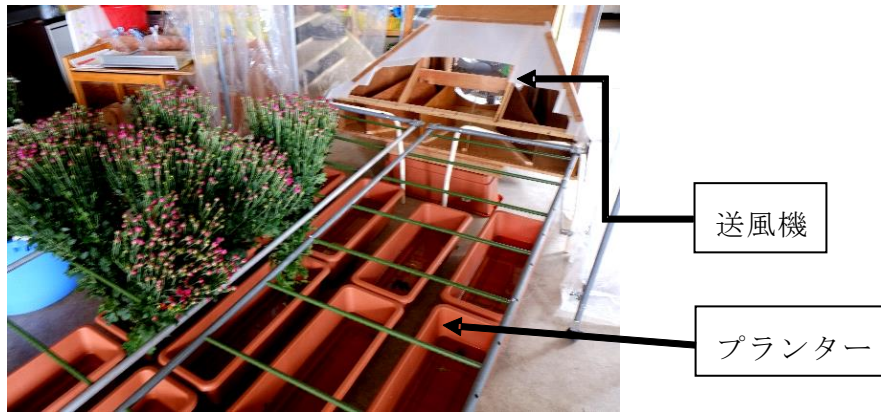


写真 8 自作の水揚げ機材の例
プランターと送風機を組合せたもの

参考：アメダスの気象データ

